

二国のはざまにある移民第二世代への進路指導

—ブラジル学校の教師たちによる〈ボーダーレスストラテジー〉の創出—

比較教育社会学コース ヨシイ オリバレス ラファエラ

Career Guidance for Second Generation Immigrants in-between Two Countries
— The Creation of “Borderless Strategy” by Brazilian School Teachers in Japan —

Rafaela Yoshiy Olivares

This paper examines the role of Brazilian school teachers in the career formation of the second generation immigrant high school students. Data was collected through semi-structured interviews with 4 teachers, 4 high school students, 5 high school graduates from 3 Brazilian schools in Japan. Brazilian school students used to return to Brazil after graduating from high school to enroll in higher education. However, in the past few years, the students' perspectives on career has changed and more students are staying in Japan after graduating from high school. Reflecting this change, Brazilian school teachers developed the “Borderless Strategy” to widen the career choices of immigrant youth in Japan and even in a third country.

目 次

1. 問題と目的
2. 先行研究と課題
 - 2.1 在日外国人学校の進路研究
 - 2.2 ブラジル学校の進路研究
3. 分析の枠組みと視点
4. 研究の対象と方法
5. ブラジル学校における従来の進路指導とその限界
6. 各学校におけるボーダーレスストラテジーの実践事例
 - 6.1 A校の事例
 - 6.2 B校の事例
 - 6.3 C校の事例

7. まとめと考察

引用文献

1. 問題と目的

1990年の出入国管理及び難民認定法の改正に伴い、出稼ぎ目的で来日した外国人はその後家族を呼び寄せたり、日本で家族を形成したりしはじめ、家族滞在が増加し、ニューカマーの子どもが問題となった。その頃、日系ブラジル人集住地域においてブラジル学校が設立されるようになり、現在も約30校が運営を続けている。

設立当初から、ブラジル学校出身の生徒の卒業後の主な進路は「ブラジルで進学」とされてきたが、近年の永住・定住志向の高まりやグローバル化を受け、日本での進学や、第三国への留学を目指す生徒もではじめている。しかしながら、現状では日本の文部科学省から高等学校相当として指定されているブラジル学校から日本の大学に卒業生を輩出している学校はごくわずかである。

本研究では、二国のはざまにある生徒たちの進路選択においてブラジル学校がどのような役割を果たしているのかに注目する。ブラジル学校の進路指導の実態を明らかにした上で、進路指導において学校側がどのような葛藤を抱えており、それらを乗り越えるために必要な施策を検討する。

2. 先行研究と課題

2.1 在日外国人学校の進路研究

日本では、「主に外国籍の子どもを対象とする」学校（志水 2014）が外国人学校と呼ばれている。中華学校や、朝鮮学校などの老舗の外国人学校、インターナショナルスクール、ブラジル学校など様々な外国人学校が存在し、その数は100校以上にも及ぶ。それらの外国人学校は、それぞれの国の教育カリキュラムに沿った授業を行い、日本の学校に適応できなかった生

徒や、母国での進学・進級を望む生徒を多数受け入れてきた。設立の背景や、各学校に通う生徒のバックグラウンドは違えど、生徒の卒業後の進路保障はどの学校においても重要課題である。特に、在留外国人の滞在が長期化する中、日本での進学を希望する生徒が増加傾向にあり、かれらの進路をどのように保障するかが問題となっている。

外国人学校の生徒は、以前は、日本の大学への受験資格を与えられていなかったが、2000年代に入ってから何度も法律の改正を重ね、外国人学校出身生徒にも日本における大学進学の門戸が開かれるようになった。

大学受験資格が緩和されたことにより、外国人学校出身生徒の大学進学率は上昇傾向にある。例えば、大阪朝鮮高級学校では日本の四大進学率が2002年には18.8%だったのに対し、2011年には37.6%まで上昇した(鍛冶 2014)。また、同校を指定して推薦枠を割り振る大学の数も増えた。同様に、東京中華学校高等部においても有名私立大学の指定校推薦枠があり、学部を選ばなければ、全員推薦入試を利用して進学できる状況にある(館 2014)。推薦入試だけでなく、センター試験を受験して国公立大学や有名私立大学に進学した生徒もいる。

朝鮮学校や、中華学校の生徒は日本国籍を有する生徒や、日本国籍を有していない場合でも何世代にもわたり日本で暮らしていることが多い。そのような生徒にとっては、日本語が第一言語であることも珍しくなく、日本での大学進学において言語が壁になることはほとんどないことも進学率の向上につながっているといえる。それだけでなく、日本の教員免許を持つ教員を配置している学校もあり、進路支援における資源が豊富であることも関係している。

近年、インターナショナルスクール出身生徒の日本の大学進学率も上昇している。その背景として、G30イニシアチブの結果として英語で学べる専門的なプログラムが拡大したことが挙げられる(山本 2014)。これによりインターナショナルスクールの生徒の場合、日本語が第一言語でない生徒にとっては、英語を活かして日本の大学に進学する道が開かれていると言える。

このように、外国人学校の生徒の日本の大学への出願資格の緩和や、大学のグローバル化を背景に朝鮮学校や中華学校、インターナショナルスクール出身の生徒の日本の大学への進学率が向上していることが先行研究から明らかになっている。その一方で、生徒が進学するまでの過程で学校において実際にどのような取り組みが行われており、学校が生徒の進路にどのよう

な影響を与えているかについては十分に議論されておらず、学校側に焦点を当てる必要があると考える。

2.2 ブラジル学校の進路研究

ブラジル学校も他の外国人学校と同様に、帰国せず日本に留まる生徒の進路をどのように保障するかが課題となっている。これまでブラジル学校の生徒の卒業後の主な進路といえば、ブラジルでの大学進学だったが、日本での進学を希望する生徒が始めている。

ブラジルの初等中等教育制度が11年の課程から12年の課程に変更されたことにより、一部のブラジル学校が日本において高等学校相当として指定され、それらの学校の出身生徒は日本の大学への出願資格を与えられることとなった。しかしながら、ブラジル学校はブラジル政府からも日本政府からもほとんど財政的な支援を受けておらず、財政が脆弱であり、十分に日本語教育の機会を生徒たちに与えられていないというのが現状である。そのため、大半のブラジル学校の生徒は日本語が不自由であり、日本語で受験したり、日本語で授業を受けたりすることが難しいというのが現状である(山脇 2010)。同様に英語を駆使して日本の大学に進学を果たすようになってきたインターナショナルスクールの生徒と異なり、ブラジル学校の生徒の中で入試レベルの英語の実力を持つ生徒はごくわずかであり、英語で卒業単位を取得できる大学に進学することも困難である。さらに、留学生を対象とした特別入試や、奨学金を設置している大学が増加する中、定住外国人を対象とした特別入試や奨学金を設置している大学はほとんどない(池上 2014)。そのため、ブラジル学校の生徒は朝鮮学校や中華学校、インターナショナルスクールの生徒、留学生と比べても不利な状況に置かれているといえる。

このような状況下で、2004年に日本に進出した、ブラジルの通信制大学に進学するブラジル学校の生徒が増加傾向にある。日本にいながら本国の高等教育が受けられる以外にも、学費が月額5万円前後と比較的安価で経済的な負担が少ないことなどを理由に人気を集めている。しかしながら、ブラジルの通信制大学は日本社会であり知られていないこともあり、卒業したとしても日本で大卒として認知されにくいといった課題かおる。また、各大学が日本に設置しているPoloと呼ばれる試験や研修を受けたりする教育センターの数が少なく、居住地によってはスクーリングが困難である場合もある(小町 2013)。

その他の選択肢として、日本でもブラジルでもな

く、第三国での進学を目指すケースも報告されている(ハヤシザキ 2014)。ブラジル学校によっては、海外への留学試験を持つ教師がいる学校もあり、生徒たちの留学を後押ししている。卒業後すぐに海外の大学に進学する生徒もいれば、一定期間海外の語学学校に通った後に現地の大学への進学を目指す生徒もいるが、留学費用が高額なため、実際に留学するまでに至らない場合も多い。

日本の大学への進学という選択肢を持ってない生徒は、通信制大学の学費や留学費用、ブラジルに進学するための費用を賄うために就職するも、収入が不安定なため、何年も働いた末に最終的に大半の生徒が工場労働に落ち着くというのが現状である。

これまでのブラジル学校における進路に関する先行研究は、生徒の進路希望など生徒に着目したものが多かった。そのため、学校側が生徒たちの新たなニーズに応えるために実践レベルにおいてどのような取り組みを行っているのかは十分に語られてこなかった。そこで、本研究では、ブラジル学校においてどのような進路指導が行われており、また指導を行う上で学校側がどのような課題や困難を抱えているのかを明らかにする。それらを踏まえて、ブラジル学校の生徒の卒業後の進路を保障するために有益となる施策を提案する。

3. 分析の枠組みと視点

先行研究を踏まえ、本研究では、「ストラテジー」の概念を用いて、ブラジル学校においてどのような進路指導が行われているのかを検討する。ストラテジーとは、学校という構造的制約のなかで直面する様々な問題・困難・ディレンマに対して、教師がそれらに対処すべく編み出した戦略(清水 1998: 137)である。

児島(2013)は、ブラジル学校における進路支援は「多方向的性への対応」と「非連続性への対応」という2つの特徴があると指摘している。ブラジル学校においては直線的、一方向的な移行は必ずしも前提とされず、学校による強調の程度に濃淡はあれども、いずれの学校も、基本的にはゆきつもどりつの、あるいは多方向的性を有する進路形成をむしろ積極的に支えていこうとしていると児島は述べている。

ブラジルおよび日本を行き来し、両国と深い繋がりを持ち、トランスナショナルな社会空間(Basch, Glick-Schiller & Blanc 1994)に生きる生徒たちが通うブラジル学校において多方向的進路選択を支えること

は必要不可欠であると言える。その一方で、ブラジル学校の制度的位置付けを考えれば、直線的な移行がそもそも困難であるがために、必然的に非連続性に対応しなければいけないとも考えることができる。

拝野(2010)は、日本に定住するなら日本の学校へ、帰国するならブラジル人学校へという二項対立的な「境界」設定により、日本でブラジル人として、ブラジル人とともに、ブラジル人のために生きていきたいという生徒自身の選択があることが見過ごされてきたと指摘している。また、こうした二項対立的な境界設定は、日本社会への同化を強調するような主張であるとも述べている。

そこで、本研究では、二国のはざまにある生徒たちの学業継続を支援するという目的を達成するためにブラジル学校の教師が発揮するストラテジーに着目し、これを「ボーダーレスストラテジー」と名付けて分析する。ボーダーレスストラテジーを通して、ブラジル学校の教師がどのように生徒たちの進路選択を支援し、また、それを実行する上でどのような葛藤を抱えているのかを検討する。

4. 研究の対象と方法

本研究では3校のブラジル学校の校長3名および教師1名、在學生4名、卒業生5名を対象に半構造化インタビュー調査を実施した。インタビューは対象者に合わせてポルトガル語で行った。調査は、それぞれの学校やカフェ、対象者の自宅等で実施し、インタビューは一人当たり1時間～2時間半にわたって行った。インタビューの内容は録音し、文字化した。

A校の女性校長は、デカセギ目的で来日した親に連れられ来日し、長女が生まれたのをきっかけに、2000年頃に家族で学校を立ち上げ、校長となった。A校はブラジル教育省の認可を受けているが、日本では各種学校としては認定されていないため、私塾として運営している。日本において高等学校相当として指定されており、卒業生は日本の大学への出願資格を有しているが、これまでA校から日本の大学に進学した生徒はいない。0歳～18歳までの全生徒約100名のうち、高校課程に在籍している生徒は10名程度である。高校生の卒業後の主な進路は就職で、ブラジルに帰国して大学に進学した生徒や、通信制大学に通っている生徒もいる。

B校の女性校長は、単身でデカセギ労働者として来日し、不就学の子どもの実態を知り1998年に学校

を立ち上げ、校長となった。B校も私塾として運営しており、昨年NPO法人に認可されている。0歳～18歳までの全校生徒数は約70名であり、うち高校課程に在籍する生徒の数は10名程度である。卒業生の主な進路は就職で、近年通信制大学への進学を目指す生徒が増加傾向にある。B校の卒業生の中にもブラジルで大学に進学した生徒が複数人いる。日本では高校相当として指定されていないが、B校の中学課程を修了し、日本の高校を経由して日本の大学に進学した生徒が1名いる。

C校の男性校長は、前校長に体育教師として採用されたことをきっかけに来日し、その後校長となった。C校の男性教師は他校で理科の教師として採用されたことを機に来日し、その後C校に転職した。C校も2000年頃に設立され、リーマンショック後に準学校法人として認可されており、卒業生の中には、帰国してブラジルの大学に進学した生徒に限らず、最近ではC校が日本の私立大学グループと提携を結んだことにより、大学傘下の語学専門学校を経由して日本の大学に進学した生徒もいる。また、C校の卒業生で、アメリカの大学に進学を果たした生徒もいる。C校には0歳～18歳までの生徒約170人が在籍しており、高校課程に在籍する生徒の数は約60人とA校やB校と比べて高校生の数が多い。毎年C校を卒業して専門学校に進学する生徒の割合は1割程度で、7割の生徒が就職、残りの2割程度がブラジル、ペルー、またはアメリカの大学に進学しているというのが現状である。

なお、本文中の生徒名は全て仮名である。

5. ブラジル学校における従来の進路指導とその限界

今回調査を行った3校においては体系的な進路指導は行われていなかった。ブラジル本国においても学校で進路指導が行われることはなく、進学を目指す生徒は予備校に通うか、経済的な余裕がない生徒は独学で受験対策を行うのが一般的である。教科によっては、教科書にブラジルの名門大学の過去の入試問題が掲載されており、教科書の問題を解き終えることで入試の出題範囲をカバーしたという一つの目安になっている。

また、ブラジル学校では、日本の高校のように就職支援を行っておらず、ほとんどの生徒が卒業後に派遣業者や親のネットワークを通じて製造業に就職する。中には、高校生の頃から工場でアルバイトをし、そのまま卒業後も同じ工場で働き続ける生徒もいる。学校

の紹介で就職するわけではないため、評定平均や出席率などは就職には影響しないことから、就職することが決まった時点でドロップアウトするケースも少なくない。

このような放任主義的な進路指導下においても、以前は、毎年のようにブラジル学校を卒業してブラジルの大学に進学する生徒がいたため、長きにわたりブラジル学校は放任主義的な進路指導を続けてきたのである。その一方で、近年、ブラジルへの帰国を望まない生徒が増加傾向にある。

ブラジルに帰りたくないわけではないけど、できるだけ(帰ること)避けたい。避けられなかったら向こう(で進学する)しかないよね。(C校のロレナ)

ロレナは小学1年生の頃からC校に通っているが、ブラジルでの進学はなるべく避けたいと語っている。ブラジルに戻りたくない理由として、「治安」や「経済状況」の悪化を挙げる生徒が多く、その他にも、長年日本に暮らしたことによる再適応の難しさを挙げる生徒もいた。生徒たちの進路展望が変化する中、教師たちの意識も変わりつつある。

もう何人も大学に進学するためにブラジルに帰って、ブラジルに帰った生徒はみんな大学に通ってます。他の人たちにも道が開けたんですよ。これからは、日本に残る生徒をどうにかしないとイケないんです。(A校校長)

日本の文部科学省から高等学校相当の指定を受けたことで実質ブラジル学校から日本の大学への進学が可能にはなったものの、ブラジル学校の生徒にとっては、日本の大学に進学するには言語面や学費面でのハードルが高い。そのため、日本に進出しているブラジルの通信制大学や第三国への留学を目指す生徒も少なくない。

学校としてはとにかく日本にいる子どもたちに学業を続けて欲しいと思っています。

(…)日本に残りたくないとか、オーストリアがいいとか、そういうことは関係ないと思っています。(…)学業を続けることが大事なんです。(C校校長)

しかしながら、日本に進出しているブラジルの通信制大学の数は限られており、コース数も少ないため、

生徒が望む学問を学べないこともある。さらには、大卒資格を取得したとしても、日本の一般企業に就職するためには高い日本語能力が求められるため、最終的に日本語能力を問わない単純労働に従事する若者も多い。また、多額の留学費用を賄うために就職したものの、収入が不安定で思うように貯蓄額が上げられず、そのまま親と同様に工場労働者に落ち着く生徒が少なくない。

こうしたなか、ブラジル学校では、生徒たちが卒業後も学業を継続していけるために、ブラジルでの進学を前提とし、進路選択にほとんど介入しなかった従来の放任主義的な進路指導から抜け出そうとしていた。

問題は子どもたちは自分たちが何をしたいのかわかっていないことです。道があれば、対策が打てます。だから私ももっと知りたいんですよね。(…) (大学に) 行ってみて、どうゆうしくみになっていて、何をしなければいけないのか。(A校校長)

通信制大学に進学するかもしれない。ブラジルに帰りたいならそうすればいい。語学専門学校に行くのもいい。かれらが学業を続けていけるように情報を提供することですね。(C校校長)

このようにブラジル学校の教師は学校の存続をかけて、生徒の将来展望の変化に対応するべく、ブラジルでの大学進学以外の学業継続手段を模索していた。そこで、次章では各学校が実際に生徒たちの進路を広げるためにどのようにボーダーレスストラテジーを実践しているのかを検討する。

6. 各学校におけるボーダーレスストラテジーの実践事例

6.1 A校の事例

A校の卒業生の主な進路は就職で、ブラジルに帰国し大学に進学する生徒は毎年1人ほどである。卒業生の中には、ブラジルでの進学費用や留学費用を調達するため、工場で働いている生徒もいた。また、工場で働きながら、ブラジルの通信制大学に通っている生徒もいた。A校は日本において高等学校相当として指定されているが、これまでにA校を卒業して日本の大学に進学した生徒はいない。A校の校長は、ブラジルへの帰国を望まない生徒たちに日本の大学や海外の大学への進学という新たな選択肢を与えるために、日本語

教育および英語教育が重要であると考えている。

教科ごとに(生徒たちが)ブラジルに戻ること意識してENEM(ブラジルにおける中等教育課程の統一試験)とか、大学入試の対策をしますけど、結局帰らないんです。だからいつも英語にフォーカスしなさいって言うんです。そしたら何か見つけられるので。(…)日本語はね…もっと(習得するのに)時間がかかるので。それでも日本語能力試験で1級とか2級とかもってる生徒もいます。(A校校長)

A校ではレベル別に週に一回、放課後に2時間程度、日本語能力試験対策を兼ねた日本語の授業を行っている。学費を賄うため、放課後にアルバイトをしている生徒もいるため、すべての生徒に受講することは義務付けていない。そのため、就労年齢に達している生徒の多くは日本語の授業を履修していなかった。

英語教育に関しては、正規の英語の授業に加え、ネイティブの英語講師を学校に招いて、希望者に対して有料で英語教室を開講している。さらに、学校の働きかけにより、学外の英会話教室を利用する生徒も増加傾向にある。これらの取り組みの成果により、日本語や英語の能力試験で実績を収める生徒が出始めている。

TOEICを受験した子がいたんですけど、多分600くらい取ってたと思います。(…)私の娘も受験したので、模擬試験が受けられるサイトを教えてあげたんです。その生徒はもう1年半か2年くらい英語をやってて、よくできた方なんじゃないかなと思います。(…)ただ、もう少し点数あげないとね。一回目は30問残して時間切れになったんです。二回目に受けた時はもう少し点数が上がってました。(A校校長)

A校では、在籍生徒だけでなく、卒業生に対しても留学支援を行なっている。卒業生の中には就職してすでに留学資金を調達できているにもかかわらず、情報不足によりなかなか留学に踏み出せない生徒もいる。そこで、A校校長は、留学フェアや筆者が紹介した留学エージェントの説明会に生徒を引率し、留学を後押ししている。実際に日本の留学エージェントを利用して卒業生のうち2名がフィリピンに短期留学を行い、A校の校長は他の生徒たちがかれらに続くことを願っている。

留学エージェントの説明会の他に、A校では、在東京ブラジル総領事館などが主催で行っている進路フェアや日本の大学のオープンキャンパスに生徒たちを定期的に引率している。しかしながら、事前に生徒や保護者にイベントの案内を送っているにもかかわらず、参加率が悪いことが課題となっている。さらに、A校では長年ロールモデルによる講演会を開催してきたが、その講演会においても「子どもたちはふざけてばかり。だから講演会で少し恥をかかされての」とA校の校長は語っていた。A校出身のルイザは講演会について次のように述べている。

学校にたくさん講演者を連れくるのね、ブラジル学校に通った経験があって、今は成功してる人で、いつも同じことの繰り返しなんだよね。成功したのは勉強したから。でも、今まで講演をしてくれた人の中で、ブラジル学校を出て工場で働かなかった人は一人もいなかった。で、お金貯めてから大学行った、みたいな。『直接大学に進学した』って人はいなかった。(ルイザ)

講演者一人一人のバックグラウンドやたどった進路は多少違ったとしても、共通する部分も多いだけでなく、「成功体験」としながらも、ブラジル学校を出て直接進学した事例が少ないため、ルイザは「こうゆう道しか残されてない」と感じていたとインタビューで語っていた。

6.2 B校の事例

B校は日本において高等学校相当として指定されていないが、卒業生の中に、日本の高校を経由して日本の大学に進学した生徒がいる。ショウが日本の高校に進学するきっかけとなったのは、B校において数年前から行われている日本の中学校への派遣事業に参加したことである。B校では、町長の協力のもと、B校近辺にある日本の中学校に毎年数名、希望制で生徒を派遣している。

B校校長：一年間、週に1回から3回通わせて、卒業間近の3か月だけ毎日通わせてます。(日本語を)よく学べるようにね。(…)
いじめにあったりもしますけど。

筆者：(日本の)学校はそういう形でも受け入れてくれるんですか？

B校校長：町長がすごくいい人で。この取り組みを

させてくれるんです。(…) こうゆうことやってるのはうちの学校だけですよ。

ショウは派遣事業に参加するまで一度も日本の学校に通ったことがなかった。それでもB校での日本語の授業や、テレビなどを通じて日本語を学び、中学3年生の時点で日本語能力試験1級を取得していた。その経験が自信になり、派遣先の日本の学校の同級生が高校進学を目指す姿を見て、彼も受験にチャレンジしてみることにした。家族や教師、本人ですら受からないと思っていたが、見事合格し、彼は地元の農業系の日本の高校に進学することとなった。進学先の高校の教師の協力を得て、AO入試を受験し、国際系の学部のある日本の大学に進学することができた。B校校長は当初、日本の中学校への派遣事業がこのような成果を生み出すとは思わなかったという。

筆者：(ショウが)日本の高校に進学するまで、彼が日本の大学に進学できると思わなかったんですか？

B校校長：日本の大学はないですね。彼自身、日本語に興味があったから、もしかしたら、とは思いましたけど。自然に起きたんですよ。

ショウに続くことを願って、B校校長は今後さらに日本語教育を強化していきたいと考えていた。また、言語教育を強化することで、日本の大学に進学する生徒が増えるだけでなく、B校の生徒数も増加するとB校校長は期待している。

小さい頃から日本語を学ばせたいと思ってます。(…) そしたら生徒の数も増えると思うんです。そうすれば親も目を向けてくれるでしょ？(B校校長)

その一方で、B校は学校経営が厳しく、現状ボランティア教師による日本語の授業を週に一回しか実施できていない。高学年の生徒に関しては、希望者を地域の日本語教室に引率しているが、放課後であることもあり、A校同様に高校生の参加率が低いことが課題となっている。

また、進路指導の一環として、言語教育以外に、B校校長は地元で開催される進路に関連するイベントに高校生を引率しているが、「遊びに行くために行っている。全然気にしてない」と生徒たちに対して不満を口にしていた。B校校長は、生徒たちのこのような態

度は、親の子どもの教育に対する関心の低さと関係していると指摘している。

6.3 C校の事例

C校は、日本の高校に行けず行き場のないブラジル人の若者を救うため、設立当初から高校生への教育に注力してきた。ピーク時には隣接県に高校課程の分校を設置するほどまでに生徒数が膨らんだが、リーマンショックを機に生徒数が激減し、分校は閉鎖となった。長年各種学校になるための準備を進めていたC校は、リーマンショック後に認定条件が緩和されたことで念願の各種学校に認定された。ちょうどその頃、以前からボランティアでC校に日本語教師を派遣していた大学から提携のオファーがかかった。

(提携先の大学グループは) もともとつながりがありましたけど、学校が認定されてからはある程度地位が確立されて、真剣に外国人の教育をやろうとしていることを認めてもらえて、いろんな人に興味をもってもらえるようになりました。(C校の校長)

2012年に提携を結んでからは、毎年数名が大学グループ傘下の語学専門学校に進学しており、その中から日本の4年生大学に編入した生徒も2名輩出している。C校では、ただ提携を結ぶだけでなく、生徒たちが実際に進学しやすくなるような仕組みづくりも進めていた。

うちの高校を卒業した生徒は学費の減額が受けられるんです。提携だけじゃなくて便利化もはかって。うちの学校の生徒のための特別クラスまで(専門学校が)設置してくれたんです。(…)私たちがどれだけ(日本語教育を)頑張っても(生徒たちの)日本語レベルはよくないので。通常の受け入れレベルに達してなくても、専門学校側が、日本語があまりできない生徒のために特別クラスを設けてくれたんです。もちろん、日本語レベルが高い生徒はそのレベルにあったクラスに入りますけど、(日本語レベルが高くなくても)頑張ってる生徒を受け入れる環境を整えてくれたんです。(C校校長)

C校では、日本語を学ぶ時間を確保するために他の科目の授業時間を減らして日本語の授業に当てている。日本人の日本語教師が3人在籍しており、日本の学校での教師経験を持つ教師もハローワークなどを通

じて採用している。授業時間数は学年ごとに異なるが、週に2〜3日、1日1〜2時間行われていて、レベル別ではなく、学年ごとにクラス分けをしており、原則全生徒が受講するようになっている。日本語教育環境がA校やB校と比べて充実しているが、多様な日本語レベルの生徒約20名に対して一斉授業を行わなければならないため、指導が行き届かないことは否めない。そのため、語学専門学校への進学は、ブラジル学校での日本語教育を補完し、進路選択の幅を広げる上で貴重なステップとなっている。

大学との提携により生徒たちにとってだけでなく、学校にとっても手続きが簡略化されたことにより、提携先への進学がスムーズにはなったものの、提携先の大学以外の大学への進学にはつながっていないというのが現状である。

筆者：入学願書を送ったりというのはどうしてるんですか？

C校校長：実は手続きのしやすさから今は提携先(語学専門学校)にしか生徒を輩出できてません。生徒個人の状況を解決するために常に手を差し伸べてあげることにはできないと感じています。それと、私たちの理解不足もあるので気をつけなきゃいけないんですよ。「先生、この書類が欲しいです」(と生徒に言われたら)出来る限り協力しますが、私たちがそのルートを敷いてあげることはしません。

C校の教師は、日本語教師以外全員ブラジルの大学出身であり、日本の大学入試や受験手続きなどに関する知識がないため、提携先の大学以外の進路の開拓に苦戦していた。提携先の大学への進学においても、願書の記入の指導や、面接対策なども提携先の大学の学生が行っていた。そのような中、C校は、ロールモデルの事例や、行政が実施するオリエンテーションの機会を活用し、生徒たちに進路に関する情報を提供していた。

ここを卒業して大学に進学した生徒は少ないから、その子たちに学校に来てもらって話してもらってます。そういう事例は少ないので。(大学等に関する)説明は複雑なので、行政の人たちと協力して毎年学内でオリエンテーションを実施してます。(C校校長の語り)

また、日本の大学への進学に限らず、C校は英語が得意な生徒向けに海外の大学への進学をサポートしており、実際に2017年に卒業した生徒が1名アメリカの大学に進学した。C校で理系科目を教える教師が、生徒から相談を受け、直接いくつかの大学にアプローチし、受け入れが決まったのだという。生徒個人が海外の大学にアプローチするよりも、学校が間に入ることで、信頼が増し手続きもよりスムーズに進んだと考えられる。アメリカの大学に進学した生徒の事例を受けて、他の生徒も海外の大学への進学を目指すようになってきている。

7. まとめと考察

本稿では、3つのブラジル学校の教師および生徒のインタビューから二国のはざまにある高校生への進路指導の実態を明らかにした。在日ブラジル学校では従来、ブラジル国内の学校同様に生徒の進路に関してあまり介入しない放任主義的な進路指導を行ってきた。ブラジル学校の卒業生の主な進路がブラジルで大学進学であった数年前までは、そのような環境下においても生徒たちは自ら進路を切り開くことがある程度可能だった。しかしながら、日本に定住するブラジル人が増え、ブラジル学校の生徒も卒業後日本に残ることを希望するようになっており、生徒たちの実力だけで進路を実現することが難しくなっている。

ブラジル学校からの連続的な移行を妨げる要因として、まず制度の壁が挙げられる。例えば、B校は日本において高等学校相当として指定されていないため、B校の生徒は日本の大学への受験資格が与えられておらず、日本の大学に進学を希望する場合、直接大学にアプローチするか転校せざるをえない状況にある。また、進学実績が少ないといったブラジル学校の学校文化も非連続的な移行に少なからず影響を与えていると考えられる。日本の大学や海外の大学に進学するには、アカデミックレベルの日本語や英語のレベルが求められることから、言語の壁も課題となっている。

このような状況下で、ブラジル学校の教師は、生徒たちの高等教育機関への移行の間にある境界線を取り払いながら、ブラジル、日本だけでなく、第三国も視野に入れ、生徒たちの学業継続を支援する「ボーダーレスストラテジー」を実践していることが本研究で明らかになった。A校、B校、C校におけるボーダーレスストラテジーの実践事例の比較を通して、ボーダーレスストラテジーの特徴として「進路先の開拓」、

「ネットワーキング」および「マルチリンガルの育成」が浮かび上がってきた。

ブラジルで大学進学という従来の進路選択にとらわれていてはブラジルでの進学を選択肢として捉えていない生徒の進路を保障することは極めて困難である。そこで、ブラジル学校は日本や第三国での進学機会を拡大させるために積極的に大学等にアプローチし、進路先を開拓しようとしていた。例えば、A校は、進路フェアや、日本の大学のオープンキャンパス、留学エージェントの説明会に生徒たちを引率することで、大学情報や、奨学金情報、留学情報等の情報収集をサポートしていた。また、B校は地元の中学校への派遣事業を通して、本来ならば、B校は日本において高等学校相当として指定されていないため、日本の大学への出願資格がないが、日本の高校を経由して、日本の大学に進学させたという実績がある。C校は、各種学校になったことが、日本の大学グループとの提携につながり、大学グループ傘下の語学専門学校を経由して日本の大学に進学する生徒も出ている。さらに、C校においては、教師の働きかけにより、アメリカの大学に進学を果たした生徒もいた。

ボーダーレスストラテジーの2つ目の特徴として「ネットワーキング」があげられる。移民の子どもたちが進路を考える上で、ロールモデルが重要な役割を果たすことはこれまでも多くの先行研究で語られてきた。日本で暮らすブラジル人のほとんどが単純労働に従事していることや、ブラジル学校からブラジルの大学以外に進学した事例が少ないことから、ブラジル学校の生徒にとって将来を思い描けない場合がある。そこで、ブラジル学校では、生徒たちが希望を失わずに新たな可能性を見出せるようにロールモデルと生徒をつなぐ取り組みを行っていた。

今回インタビューを行った対象者全員が進路に関する情報をインターネットから収集していた。しかしながら、インターネット上には多言語の進路情報がなく、インターネット上だけで進路に関する疑問を解決するには限界がある。そのため、ロールモデルの生の声を聞くことで、より詳細な情報を得たり、インターネットで調べた内容の真偽を明らかにしたりすることが可能になるのである。さらに、生徒たちとロールモデルがSNSを通じて交流することで、いつでも進路に関する疑問を解決することが容易になるといった効果もある。最近では、進路フェアなどにロールモデルを招くことも定番になりつつあり、生徒たちをそういったイベントに引率することで、それぞれの学校の

卒業生といった枠を超えたロールモデルとも接触できるようになっている。

数年前までは、小中学生を対象にした日本の高校受験に関する進路説明会が主流だったが、最近では高校生を対象にしたものも見られるようになってきた。高校生を対象にしたイベントの中には、大学進学フェアとして日本の大学や語学専門学校などがブースを出展しているものや、職業フェアとして保育士や通訳、ホテルの従業員など様々な職業に就いている人と交流できるものもあり、生徒や保護者のニーズに合わせて年々進化を遂げている。さらに2017年には初めて在東京ブラジル総領事館主催で進路フェアが2日間にわたり開催され、A校の生徒を含め多くのブラジル学校の生徒が参加した。このように、ブラジル学校だけでなく、支援団体や行政の取り組みも生徒たちのニーズに合わせて変化を遂げていることがわかる。

ボーダーレスストラテジーの3つ目の特徴は、「マルチリンガルの育成」である。これまで、ブラジル学校に関する先行研究では、「ポルトガル語」と「日本語」が話せるバイリンガルの育てることがブラジル学校の役割として語られることが多かった。しかし、本調査では、日本の大学の中でも英語だけで卒業単位を取得できる大学や海外の大学への進学を視野に入れ、「英語」教育を重視しているブラジル学校の姿が見られた。「英語ができたならまだいけると思えます。英語も日本語もできなきかたら人生どうするの?」といったB校校長の語りからも、生徒だもの進路を切り開くツールとしての「英語」に期待が寄せられていることがわかる。

このような認識のもと、A校では外部の英会話教室と提携を結び、ネイティブの教師から英語を学ぶ機会を生徒たちに提供したり、B校でも週末にネイティブの教師を学校に招いて英会話教室を開講したりするようになった。C校でも、英語の授業専用の教室を設置するなどして、英語教育に力を入れている。

ボーダーレスストラテジーを用いてブラジルに限らず、日本や第三国への留学を目指す生徒のたちのニーズに対応しようとしているブラジル学校ではあるが、卒業後実際に進学する生徒は現状1割程度にとどまっている。その他の生徒は進学を断念し、就職しているというのが現状であり、支援の裏側でブラジル学校が抱えている葛藤も本研究で明らかになった。

生徒たちは、ロールモデルによる講演を聞いたり、進路に関するイベントに参加したりすることで進路に関する知識を得ることができたとしても、実際に生徒

を次のステップに送り出す役割はブラジル学校が担っている。つまり、進路対策や進学に関わる手続きは学校側に委ねられているということである。しかしながら、ブラジル学校の教師は日本の大学受験等に関する知識がないため、大学選びや受験対策、受験手続き等をどのように行えばいいのかかわからず、進路支援において膠着状態にあり、思うような結果が出せないジレンマを抱えていたのである。

このように、教師の知識不足により事前に対策を打つことが難しく、生徒の要望に応じて教師の手の届く範囲で支援するという体制にならざるをえないことがわかる。そのため、新しい進路を開拓するには時間がかかるだけでなく、リスクも伴うため、すでにルートが確立されている進路に生徒が流れる傾向が見られた。ブラジル学校としてはより積極的に進路支援を行いたいところだが、未だに学校の役割を模索している段階で、現在行っている進路支援を継続するのが精一杯というような状況なのである。せめてもの思いでこれまでの進路支援を続けているものの、なかなか生徒の進学アスピレーションの加熱にまで至らず、努力が空回りするような様子もインタビューから示唆された。

児島(2013)は、ブラジル学校における進路支援の特徴として、多方向性への対応と非連続性の対応を挙げているが、本研究の結果から、ブラジル学校はボーダーレスストラテジーを通して、より連続的な進路選択を可能にしようとしているといえるのではないだろうか。非連続的な進路選択の結果、「いつか大学に進学する」といった不確実な目標を抱えながら工場労働を抜け出せないブラジル学校出身生徒が後を絶たず、ブラジル学校も一教育機関として、このような状況を一刻も早く脱したいという思いが学校の取り組みや教師たちの語りから伝わってきた。

本研究から導かれるブラジル学校における進路指導をより充実させるための施策としては、ブラジル学校の教師に対してポルトガル語での情報提供および研修の実施が有効であると考えられる。現在、各自治体主体で行われている進路関連イベントは生徒を対象としたものばかりで、生徒たちを大学機関等に送り出す教師に対する情報提供は行われていない。今後、より質の高い支援を提供するためには、教師の進路に関する知識を深めてもらうことが極めて重要である。そのためには、進路指導に関する教師研修などを継続的に実施することが必要であると考えられる。

これらを実現するには、ブラジル学校だけでなく、

行政や社会全体で取り組む必要がある。特に、ブラジル学校の教師が日本の教育制度に関する知識を十分に有していないという点から、地元の高校や大学など、外部教育機関との連携を推進することで、ブラジル学校における進路指導がより一層充実すると考えられる。これに関してはB校が実施している日本の中学校への派遣事業や、C校の大学との提携といった取り組みを一つのモデルとして取り上げることができるだろう。小中学校の段階で連携を図れば、日本社会とのつながりが生まれ、ブラジル学校の子どもたちの進路選択の幅が格段に広がるであろう。

ブラジル学校で起きている問題をブラジル学校だけの問題とせず、日本社会の問題として捉え、表面的な支援に止まらず、ブラジル学校と協働で移民第二世代の進路保障に取り組むことでこの問題が改善に向かうのではないだろうか。

今後は、移民第二世代が通う日本の高校にも対象を広げ、ブラジル学校の進路指導との比較を通して、二国の制度のはざまにある生徒への進路指導の実態をより深く検討したい。

引用文献

- 教育政策の課題』明石書店, pp. 88-102.
- 山本ベバリーアン. 2014. 「過去と現在の親密な結びつき—横浜インターナショナルスクール」志水宏吉他編『日本の外国人学校—トランスナショナルリティをめぐる教育政策の課題』明石書店, pp. 301-315.
- 山脇千賀子. 2006. 「日本の学校とエスニック学校：はざまにおかれた子どもたち」宮島喬・太田晴雄編『外国人の子どもと日本の教育：不就学問題と多文化共生の課題』pp. 97-103.
- (指導教員 額賀美紗子准教授)
- 拜野寿美子. 2010. 『ブラジル人学校の子どもたち—「日本かブラジルか」を超えて』ナカニシヤ出版.
- ハヤシザキ・カズヒコ. 2014. 「家族のような学校エートスと全人教育—エスコラ・オブジェクター・ジ・イワタ」志水宏吉他編『日本の外国人学校—トランスナショナルリティをめぐる教育政策の課題』明石書店, pp. 226-241.
- 池上重弘. 2014. 「定住外国人学生の修学実態調査報告：静岡県西部地域の大学を中心に」『静岡文化芸術大学研究紀要』14巻, pp. 97-100.
- 児島明. 2013. 「教育機関としてのブラジル人学校」『教育と社会研究』第23号, pp.93-101.
- 小町友樹エベルチ. 2013. 「在日ブラジル人の通信制大学について」『愛知淑徳大学現代社会研究科研究報告』第9号, pp.59-78
- 志水宏吉・中島智子・鍛冶到編著. 2014. 『日本の外国人学校—トランスナショナルリティをめぐる教育政策の課題』明石書店.
- 清水陸美. 1998. 「教室における教師の『振る舞い方』の諸相—教師の教育実践のエスノグラフィー—」『教育社会学研究』第63集, pp. 137-156
- L. Basch, N. Glick-Schiller, and C. S. Blanc. 1994. "Nation Unbound.", *Gordon and Breach Science Publisher*
- 館奈保子. 2014. 「日本の有名進学校を目指す—東京中華学校」志水宏吉他編『日本の外国人学校—トランスナショナルリティをめぐる教育政策の課題』明石書店, pp. 181-196.
- 鍛冶致. 2014. 「つなげよう民族の心—大阪朝鮮高級学校」志水宏吉他編『日本の外国人学校—トランスナショナルリティをめぐる